

# 来し方行く末

## ——経歴と仕事——

### 三 瓶 慎 一

**1959（昭和34）年10月13日** 東京都新宿区で出生，世田谷区烏山を経て千葉県松戸市へ転居，大学院修了まで松戸市で暮らす。

松戸市立稔台小学校に入学後，転居のため同松飛台小学校に転校。小学生の頃の将来の夢は魚類学者。水族館の設計図を描いたり，あらゆる魚の標準和名や生態などを覚えたり，そんなことに熱中する。その後，東京都台東区立蔵前中学校に越境通学する。通学で鉄道に詳しくなり，土曜日の午後は，上野の東京文化会館音楽資料室に入り浸り，重いヘッドフォンでの頭痛に苦しみながら，クラシック音楽のあらゆるレコードを聴く。

**1975年4月～1978年3月** 東海大学高輪台高等学校に在学し，卒業

1年次に海洋博を含む復帰3年後の沖縄への研修旅行で，大学の研修船で往復する。ほとんどの参加者が船酔いでダウンしてしまい，配膳，食器洗い，甲板掃除などの当番のほとんどすべてを引き受ける。現在では信じられないが，プラスチックも含む航海中のゴミの処理は「砂になるから」という理由で，すべて海洋投棄だった。この時以来の不安がいま現実になっている。

2年次の4月から，NHKテレビ講座でドイツ語を学び始める。その後，元京城帝大教授の紅露文平先生が主宰するドイツ語講座で，「ロゴスの神に礼！」と挨拶して始まる，その独特の授業に触れる。ある別の講座で新潟大学の横溝節男先生に出会い，あまりにも明解な文法解説に魅了される。

**1978 年 4 月～1984 年 3 月** 早稲田大学法学部に在学し、卒業

入学直後の初夏の早朝、法学部読書室から、30 歳過ぎだろうかという、よれよれのジーンズにゴム草履、汚れた肌着シャツの無精髭の男が、首からタオルを下げ、歯ブラシをくわえて現れたのに驚愕し、一瞬にして司法試験受験をきっぱり断念する。

語学教育研究所で、上田浩二先生、子安美知子先生、Karl-Heinz Ludwig 先生などの授業でドイツ語運用力を鍛えられる。

友人を通じて、恩師となる鐵野善資先生宅の勉強会に参加する幸運を得て、毎週土曜日に板橋のご自宅に通う。

**1980 年 7 月～1982 年 3 月** サンケイスカラシップ奨学金により西ドイツ・ミュンヘン大学に留学

チャンスは 3 回あるから、4 年次にでも受かれば、という軽い気持ちで受験したら、予想外に 1 回目で合格し、3 年次夏に、開港 2 年後の成田国際空港からアンカレッジ経由で西ドイツに渡航。人生初の飛行機、人生初の外国行き。北ドイツのリューネブルクのゲーテ＝インスティトゥートでドイツ語を学ぶ。ここで偶然知り合った井田良氏、萩原能久氏と、まさかその後学部の同僚になるとは夢にも思わない。

ミュンヘン大学では特に Theo Vennemann 教授の音韻論の講義に感銘を受ける。夜はオペラに入り浸り、Karl Böhm, Carlos Kleiber, Wolfgang Sawallisch 他の指揮、綺羅星の如き名歌手の出演に心ときめかせる。ミュンヘン・フィルのコーラスに加わり、Sergiu Celibidache 他の指揮で歌った。特にルカ教会でのブラームス『ドイツ・レクイエム』の忘れがたい名演は CD にもなった。

**1984 年 4 月～1986 年 3 月** 慶應義塾大学大学院文学研究科（独文学専攻）修士課程に在学し、修了

ドイツ語副詞研究の大家である岩崎英二郎先生と、後に教授として文学部に赴任されるドイツ中世文学の泰斗、平尾浩三先生（当時は東京大学教授）に師事できるという幸せを噛みしめる。単位互換制度で学習院大学大学院の授業にも

加わり、早川東三先生、橋本郁雄先生の薫陶を受ける。慶應と学習院の素晴らしい学友たちにも恵まれ、一緒によく学び、よく飲む。

**1986年4月～1989年3月** 慶應義塾大学大学院文学研究科（独文学専攻）博士課程に在学し、単位取得退学

博士課程2年次から、学業に並行して塾内で非常勤講師として計5コマを担当する。慶應での在勤は、どうやらここから数えても良いらしい。

**1987年4月～1989年3月** 慶應義塾大学理工学部、同大学語学視聴覚教育研究室、慶應義塾外国語学校非常勤講師

特に外国語学校では、自分の親ほどの年齢の、人生経験豊かな人たちに教える機会を得る。授業後の飲み会では、むしろ教わることの方が多い。

**1989年4月**に慶應義塾大学法学部に奉職する。身に余る光栄。

1989年4月～2000年3月 慶應義塾大学法学部専任講師

2000年4月～2006年3月 慶應義塾大学法学部助教授

2006年4月～2025年3月 慶應義塾大学法学部教授

人手不足ゆえ、カリキュラムの上で必要ないろいろな授業を引き受ける。「地域文化論」などでは、受講生との双方通行を心掛けたが、今回の講義の準備には毎週1日を費やし、自分が最も勉強させてもらったと思う。幅広く授業担当をしてきたが、「何でも来いに名人なし」なのだろう。

在職中、並行して東京工業大学、麗澤大学外国語学部、東京外国語大学、立教大学文学部などの非常勤講師を歴任した。それぞれ与えられた条件で、最適なパフォーマンスに努める。他大学と比較することで、本務とする法学部の教育のあり方を考えるきっかけともなる。

大学内では、学生総合センター学生部門委員、通信教育部学習指導副主任、学習指導副主任、国際センター副所長などを歴任した。学部内のものも含め、かなり真面目に学校行政に尽くしてきたと思う。

## 学会活動

日本独文学会, 日本独文学会ドイツ語教育部会, ドイツ文法理論研究会, 日本ドイツ語情報処理学会, 日本言語政策学会, 日本外国語教育推進機構, 日本ドイツ学会, 日本ワーグナー協会に所属。

日本独文学会では, 広報担当理事, 渉外担当理事, 企画担当理事, アジア・ゲルマニスト会議実行委員, 語学ゼミナール実行委員, 教授法ゼミナール実行委員長などを歴任。

日本独文学会ドイツ語教育部会では, 企画担当幹事, 庶務担当幹事, 部長を歴任。シンポジウム「日本におけるドイツ語教育のランドスケープ」シリーズ, シンポジウム「ドイツ語教育部会はだれの(ため)のものか?」シリーズを企画し, ドイツ語教育界の課題について議論を促す。

ドイツ文法理論研究会では, 機関誌編集長, 事務局長を歴任。

2009年にドイツ・イェーナで行われた国際ドイツ語教員連盟大会で, 日本独文学会ドイツ語教育部会の上位団体である国際ドイツ語教員連盟(Internationaler Deutschlehrerverband 現 Internationaler Deutschlehrerinnen- und Deutschlehrerverband [IDV])の副会長にアジアから初めて選出され, 2013年のイタリア・ボルツァーノ大会まで務める。メールでヨーロッパの委員が議論しているのと時差があるため, 当方が発言する頃には大勢が決まっているということが多く, 不満も多々。学期中, 特に入試委員任期中の度重なる海外出張にも難儀する。反面, トルコ, インド, ルーマニア, ラトヴィア, ロシアなど, なかなか訪れる機会のない国々のドイツ語教育の現状を知る貴重な機会を得る。

## 著書

- ・ CDで学ぶドイツ語入門 [改訂版] (白水社, 2006年9月)
- ・ ホントにあったウソみたいな話 (白水社, 2002年3月)
- ・ CDで学ぶドイツ語入門 (白水社, 1999年5月)
- ・ 音から入るドイツ語 (白水社, 1999年3月)
- ・ 独和中辞典 [執筆協力] (研究社, 1996年11月)
- ・ ドイツ言語学辞典 [執筆協力] (紀伊國屋書店, 1994年5月)

自著を全面改訂することの他に、新著の計画もある。中でも恩師 鐵野善資先生が遺していかれた『独和中辞典』の仕事を進めて、改訂版の実現を目指したい。

## 訳書

- ・ 中世の騎士文化 [共訳] (白水社, 1995 年)  
いくつか翻訳中, 翻訳を企画中のものがある。

## 論文 [一部]

- ・ Musik, Logik, Germanistik — ドイツ語の -ik 外来名詞のアクセントについての試論—— (『教養論叢』第 146 号, 2025 年 2 月)
- ・ 日本における成人によるドイツ語学習動機について——ドイツ語母語話者のドイツ語離れとの関連で—— (『慶應義塾大学日吉紀要 ドイツ語学・文学』第 55 号, 2018 年 3 月)
- ・ Wozu lernen Erwachsene in Ländern wie Japan Deutsch? — Gibt es andere Gründe, Deutsch zu lernen, als wirtschaftliche? (Akten des XIII. Internationalen Germanistenkongresses Shanghai 2015 — Germanistik zwischen Tradition und Innovation, Bd. 5, 2017.)
- ・ 研究対象としてのインテンシブコース—慶應義塾大学義塾大学法学部ドイツ語インテンシブコースにおける研究プロジェクト構想 [ミヒャエル・シャルト, アンケ・バックハウス, 森朋子と共著] (『慶應義塾 外国語教育研究』創刊号, 2004 年)
- ・ 21 世紀日本におけるドイツ語教育政策とドイツ語教員の役割 (『日本の視点からゲルマニスティックの新しいパラダイムを探る』日本独文学会研究叢書 24, 2004 年)
- ・ Fremdsprachenkompetenz als Infrastruktur — vom privaten Vermögen zum Sozialkapital. („Neues Jahrhundert, neue Herausforderungen — Germanistik im Zeitalter der Globalisierung“, 2004)
- ・ Was und wie? Die Öffentlichkeitsarbeit der Japanischen Gesellschaft für Germanistik

- und Möglichkeiten der Zusammenarbeit mit deutschsprachigen Lektoren. („Deutschunterricht an japanischen Universitäten. Eine Standortbestimmung“, 2003)
- ・ 日本の大学ドイツ語教育のコンテンツ：カリキュラム策定のためのマトリックス（慶應義塾大学独文学研究室『研究年報』第 20 号，2003 年）
  - ・ Die Bildungslandschaft „Deutsch in Japan“ und die soziale Verantwortung der Bildungsvermittler – Grundkonzepte der reformierten Curricula für ein intensives Deutschstudium an der Juristischen Fakultät der Keio-Universität („Curriculum 2000 – Impulse zur curricularen Neuorientierung der koreanischen Germanistik“, 2001)
  - ・ 副詞 noch の機能について——焦点化詞試論——（『教養論叢』第 115 号，2001 年）
  - ・ Die Wende der Hochschulcurricula — „Bildungslandschaft »Deutsch in Japan« —（『教養論叢』第 111 号，2000 年）
  - ・ 法学部のドイツ語インテンシブコース——構想・思想・現状——（『慶應義塾大学日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション』第 24 号，2000 年）
  - ・ 日本におけるドイツ語教育のランドスケープを鳥瞰する——変容を迫られる大学カリキュラム——（『ドイツ語教育』第 4 号，1999 年）
  - ・ 設置基準大綱化以降の大学のドイツ語教育における基本理念——社会科学系学部におけるコンセプトとその実践——（『教養論叢』第 104 号，1996 年）
  - ・ Das neue Konzept für die Deutschkurse an der juristischen Fakultät der Keio Universität — Ein Pilotstudiengang im Fach Jura/Politologie („Deutsch in Japan. Interkulturalität und Skepsis zwischen Vergangenheit und Zukunft«, DAAD, Bonn, 1996)
  - ・ 大学のドイツ語教育におけるデイベイト訓練の意義（『教養論叢』第 91 号，1993 年）
  - ・ Die Partikel „wohl“ und einige ihrer Bedeutungsvarianten: unter besonderer Berücksichtigung der „Vermutungs“-Bedeutung（『藝文研究』第 52 号，1988 年）
  - ・ Zu den Gebrauchsvarianten der Partikel „doch“ in mittelhochdeutschen Epen – unter

besonderer Berücksichtigung der Korpora aus dem Epos Hartmanns „Iwein“ – (『エネルゲイア』第12号, 1986年)

- Zu den Gebrauchsvarianten der Partikel „doch“ in den mittelhochdeutschen Epen — Versuch einer Grundlagenstudie der historischen Partikelforschung (慶應義塾大学修士論文, 1986年)

今後、ようやくじっくり腰を据えての歴史的副詞研究に復帰する(したい、できるか?)。

### 研究発表・講演など [一部]

- Eine theatralische Sendung der Deutschlernenden in Japan — ein Sommerseminar unter politologischen Aspekten. (XVII. Internationale Tagung der Deutschlehrerinnen und Deutschlehrer, Wien, 2022年8月)
- 25 Jahre Intensivkurs Deutsch für Studierende aus dem Bereich Sozialwissenschaften an der Keio-Universität — Versuche einer grenzüberschreitenden Hochschulbildung in Kombination mit dem Fremdsprachenunterricht — (台湾独文学会年次大会, 文藻外語大学, 高雄, 2019年11月)
- Wozu lernen Erwachsene in Ländern wie Japan Deutsch? — Gibt es andere Gründe, Deutsch zu lernen, als wirtschaftliche? (XIII. Kongress der Internationalen Vereinigung für Germanistik [IVG], Shanghai, 2015年8月)
- Abweichende Gründe und Motivationen zum hochschulischen Lernen der deutschen Sprache als „Kultursprache“ — Studierende lernen anders als Schüler (Internationale Deutschlehrertagung, Bozen, 2013, Podium „Deutsch in Schule, Studium und Beruf“, 2013年8月, シンポジウムパネリスト)
- 2005年バイロイト音楽祭報告 (日本ワーグナー協会 第260回例会ワーグナーゼミナール, 2005年9月)
- Fremdsprachenkompetenz als Sozialkapital — Sprachenpolitische Überlegungen (Internationale Deutschlehrertagung, Graz, 2005年8月)
- Kommunikative Methode für gehemmte Deutschsprecher — Gegenäußerung zu

Birgit Lisker (»Lektorenrundbrief« [DAAD] Nr. 24, 2004)

- ・ 21 世紀日本におけるドイツ語教育政策とドイツ語教員の役割 (日本独文学会春季研究発表会シンポジウム「日本のゲルマニスティックの新しいパラダイムの構築に向けて」, 2004 年)
- ・ (Fremd-)Sprachenkompetenz als Sozialkapital (日本独文学会第 9 回ドイツ語教授法ゼミナール, 2004 年 3 月)
- ・ Fremdsprachenkompetenz als Infrastruktur — Vom privaten Vermögen zum Sozialkapital (Asiatische Germanistentagung, 2002 年 8 月)
- ・ 日本の大学ドイツ語教育のコンテンツ——カリキュラム策定のためのマトリックス (日本独文学会春季研究発表会シンポジウム「日本におけるドイツ語教育の座標軸を考える——ゴールから決めるスタートとプロセス」, 2002 年 6 月)
- ・ 早慶の (特に社会科学系の) 学生にとっての外国語学習とは何か? ——単位を取ったらできること (早稲田大学法学部外国語科目検討委員会 これからの外国語教育を考える, 2002 年 2 月)
- ・ 大学でなおも「外国語」の教育? ——その戦略的転換 (広島大学外国語教育研究センター第 6 回研究集会, 1999 年 12 月)
- ・ Die Wende der Hochschulcurricula — Bildungslandschaft 'Deutsch in Japan' (Lektoren-Fachseminar des DAAD, 1999 年 11 月)
- ・ 日本の大学外国語教育の抱える問題——大学教員は何をなし得るか (民主教育協会東海支部 学生生活研究セミナー, 1999 年 8 月)
- ・ 日本におけるドイツ語教育のランドスケープを鳥瞰する——変容を迫られる大学カリキュラム (日本独文学会春季研究発表会シンポジウム「日本におけるドイツ語教育のランドスケープと大学教員の社会的責任」, 1999 年 5 月)
- ・ Ein intensives Lern- und Studienaufenthaltsprogramm für deutschlernende Sozialwissenschaftler an der Juristischen Fakultät der Keio-Universität (SIETAR Congress, 1998 年 11 月)
- ・ シューベルト——時代, 人, 自然 (神戸女学院春季公開講座, 1997 年 6

月)

- ・ Zur Möglichkeit der komplementären Anknüpfung von Deutsch- und Fachstudium — ein Pilotprojekt an der juristischen Fakultät der Keio Universität (Medien-didaktisches Fortbildungsseminar, 1996年12月)
- ・ 慶應義塾大学法学部のドイツ語インテンシブコース——教育コンセプトをどう考えるか? (横浜市立大学外国語教育シンポジウム, 1996年11月)
- ・ ドイツ語教育の新しいコンセプト——慶應義塾大学法学部での一例とその目標・対象・理想 (日本独文学会西日本支部教育部会研究発表会, 1996年7月)
- ・ Ein Modellstudiengang an der Keio-Universität: Intensivkurse im Bereich Deutsch für Juristen und Politologen (Lektoren-Treffen des DAAD, 1996年5月)
- ・ Das neue Konzept für die Deutschkurse an der juristischen Fakultät der Keio Universität — Ein Pilotstudiengang im Fach Jura/Politologie. (Lektoren-Fachseminar des DAAD, 1995年)
- ・ 中高ドイツ語叙事詩における doch の用例分類の試み (第63回ドイツ言語理論研究会, 1985年9月)
- ・ Gebrauchsvarianten der Partikel ‚doch‘ in mittelhochdeutschen Epen (日本独文学会第14回語学ゼミナール, 1985年9月)
- ・ *eben* und *halt* — eine nördlich-südliche Varianz? (第28回ドイツ語学文学研究会, 1985年8月)

#### エッセイ, 解説, 書評など [一部]

- ・ ドイツ語インテンシブコースの30年を振り返る (『教養論叢』第146号, 2025年2月)
- ・ 思考のすゝめ「忘却する人・瞳目する人」(『三色旗』2024年4月号)
- ・ Musensohn 逝く——ベーター・シュライヤー追悼 (『Die Brücke』[公益財団法人 日独協会], 2020年4月号)
- ・ 「メルケル首相, 塾生と語る」訳・注 (『三田評論』2019年6月号)
- ・ So doch noch erst recht — ein Nachruf für Eijiro Iwasaki (『Neue Beiträge zur

Germanistik« Band 16, Heft 1, 2017)

- ・ IDV と日本のドイツ語教育 (»Brunnen« [郁文堂] Nr. 479, 2013 年 1 月)
- ・ 他学会からの寄稿「日本独文学会ドイツ語教育部会」(JACET 通信, 2012 年 7 月)
- ・ 鐵野善資先生を送る (『三田評論』2012 年 6 月号)
- ・ ひそやかな誘い〜R. シュトラウス歌曲集 (望月哲也 ten./河原忠之 pf.) 解説「この CD について」(マイスターミュージック, 2011 年)
- ・ 巻頭言「暑いスクーリングに向かう熱いあなたへ」(『三色旗』2010 年 8 月号)
- ・ 激震・弱震「アジア・ゲルマニスト会議に参加して」(『三色旗』2007 年 1 月号)
- ・ 「『日本における』ドイツ」年? (»Laterne« (同学社) 93 号, 2005 年 3 月)
- ・ 激震・弱震「ドイツの流行語大賞に思うヨーロッパと日本のいま」(『三色旗』2004 年 3 月号)
- ・ Boarisch と私 (»Brunnen« [郁文堂] Nr. 419, 2003 年 6 月)
- ・ Wozu eigentlich “Wozu eigentlich?” (Lektorenrundbrief Nr. 16, 2001 年 12 月)
- ・ コンピュータを利用した外国語学習法 第 4 回 座談会〈ニューメディアによる今後の外国語学習法の展望〉司会 (『三色旗』2001 年 5 月号)
- ・ リレー連載 言語ジャーナル [ドイツ] (『言語』2000 年 11 月号)
- ・ 夜間スクーリングを終えて「学び方を学ぶスクーリング」(『三色旗』2000 年 4 月号)
- ・ フォルム・リテラールム「『文法』教育と社会言語学の日」(『教養論叢』第 100 号, 1995 年)
- ・ 『教養論叢』1~100 号執筆者別総目録 (編, 『教養論叢』第 100 号, 1995 年)
- ・ ドイツ語辞書とのつきあい方 (『三色旗』1995 年 10 月号)
- ・ フォルム・リテラールム「ドイツ統一とマスコミの語彙」(『教養論叢』第 88 号, 1991 年)
- ・ 私の研究ノート「『使える』語学力をめざして——あるドイツ語合宿」

(『塾』, 1991年6月)

- ・ 研究最前線 (『慶應 BRB フォーラム』101号, 1991年3月)
- ・ 辞書の選び方 使い方ガイド「ドイツ語 言葉がもつ『ふくらみ』」(週刊読書人, 1990年3月)
- ・ 書評「アルファ独和辞典」(週刊読書人, 1990年1月)
- ・ フォルム・リテラールム「シュマールカルデンにイーヴェインを訪ねる」(『教養論叢』第82号, 1989年)
- ・ ひとりのできるドイツ語の学び方——ある学習者の経験から (『三色旗』1989年12月号)
- ・ 月刊誌『基礎ドイツ語』(三修社刊)のテキストや文法記事, 文化記事, 新刊書紹介等の執筆, 特集企画, 編集, 校正, 音声教材の台本執筆, スタジオ録音等を担当。(1989年10月~2004年3月の休刊まで)
- ・ 激震・弱震「(核)分裂過程という映画——西ドイツの市民運動」(『三色旗』1989年9月号)
- ・ 教材紹介 ドイツ語 (『らぼ通信』第69号, 1988年3月)

## 社会活動 [一部]

大学入試センター教科専門委員 (ドイツ語), 通訳案内士試験委員, 観光庁「通訳案内士のあり方に関する検討会」委員などを歴任。

- ・ ドイツ ホストタウンオンライン交流事業  
「高校生がドイツの事例から考えるスポーツを通じた共生社会・地域活性化への提言」運営協力 (2020年11月~2021年2月)  
「ホストタウン高校生がドイツから学び・考える地域の課題解決~高校生が考えるホストタウンの取組を通じた『共生社会の実現』・『地域活性化』のために私たちができること~」運営協力 (2021年5月~8月)  
(以上, 共催: 内閣官房東京オリンピック・パラリンピック推進本部事務局・読売新聞東京本社オリンピック・パラリンピック事務局)  
[2020年春に始まる新型コロナウイルスの蔓延により, 合宿などのすべての課外の教育活動が不可能となる中, ちょうど依頼のあった「ドイツホ

スタウンオンライン交流事業」への協力を2回にわたって引き受けることで、インテンシブコースの学生諸君のための課外活動の代替とする。]

- ・ 観光庁「通訳案内士のあり方に関する検討会」委員（2009年6月～2011年4月）
- ・ シューベルト作曲『冬の旅』（橘茂 bar./ 戎洋子 pf.）解説（三木山森林公園 森の文化館 音楽ホール、2003年3月9日）
- ・ ベートーヴェン作曲『交響曲第9番』公演（外山雄三指揮・大阪フィルハーモニー交響楽団）に向けて、フロイデ合唱団・尼崎フロイデ合唱団（1998年12月14日公演）、堺フロイデ合唱団（1998年12月16日公演）、神戸フロイデ合唱団（1998年12月17日公演）での複数回のドイツ語指導

こうしてみると、文字で書き留められるような仕事はたいしてしてこなかったとも思える。ここに挙げた他にも、記録し損ねた講演や運営協力、政府委員など、いくつもあった。その都度の求めに応じて、ドイツ・ドイツ語に関わるいろいろな仕事を、真摯に引き受けてきたことだけは間違いない。今後は、腰を落ち着けてそれらを包括するようなものを成したい。と同時に、自然、環境、エネルギーなど、関心を抱きながらあまり今まで関わってこなかった世界にも、足を踏み入れてみたいと思っている。